Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！　－Ｓｔｏｒｙ－

バスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！　―Ｓｔｏｒｙ―

【Ｎコード】
Ｎ７３３９Ｔ

【作者名】
バスター

【あらすじ】
「加藤光（かとうひかる）」は死んだ。そして次に目覚めたのは死後の世界だった。この世界で「光」は理不尽な人生を強いた神に反逆する「死んだ世界戦線」に入隊し神に反逆することにした。

この作品について

この作品は、作者の自己満足のための作品であり、オリジナルの話がありますので、そういうのが苦手な方は「閉じる」を推奨します。

そして、作者は文章を書くことに関してはまったくの素人ですので脱字・誤字や「わかりずらい文章」、自分勝手な解釈などがあると思いますが、ご了承ください。

尚、できる限りなくしますが、もし脱字・誤字があった場合教えていただければすぐに直します。

戦闘時は特にごちゃごちゃとした文章になると思います。
ですので、ここで書き方の説明をさせていただきたいと思います。

まず、「相手は右から左へ刀を振るった」という文があった場合、こちらから見て「右から左へ刀を振るった」というふうになります。

次に、「相手は右手から左手へ刀を持ち替えた」という文があった場合、
相手の「右手から左手へ刀を持ち替えた」というふうになります。
上のとはちがい、「相手の」ということになります。

この文章でさえ、わかりづらいと思いますが上記のように書いていきますので、お願いします。

最後に投稿間隔ですが、1週間に2回ぐらいのペースで行きたいと思います。

それでは、長くなりましたがこの作品をどうぞよろしくお願いします。

主人公設定

・名前　加藤光
・身長　１７０ｃｍ
・体重　６５ｋｇ
・顔　上の中ぐらい。
・髪型　ベリーショート
・武器　おもに刀。二刀流をおもに使う。
・性格　明るい性格で、冗談を言うことが多い。
　常に誰かを助けたいと思っており、困っている人がいたら見逃せない。

自分の頭の中ではこんな感じです。かなり優秀な性格ですが、お許しください。
生前の記憶に関しては、小説本編で書いていきたいと思います。

今後もオリジナルキャラを出していくと思います。
そのときはまた「オリキャラ設定」という項目を作り、こんな感じで補足を入れて生きたいと思います。

では、次の話から小説本編となります。
いたらぬ点は多くあると思いますが、これからよろしくお願いします。

プロローグ

・・・なんでだよ。何でまたこんなことになってんだよ。

地面に仰向けになりながら、顔だけを上げ前方を見つめながら俺は思った。

意識は朦朧とし、頭から恐ろしいほどの血が流れ、もう持たないことは明白だった。

あの時誓ったのに・・・あのときから変われたと思っていたのに。

俺の人生ってこんなものなのかよ。

どんなにがんばっても、どんなにもがいても、すぐに壊れる。

俺に幸福は訪れないのか？求めちゃいけないのか？

・・・ちくしょう・・・ちくしょう・・・。

俺は前方の絶望的な光景をただひたすら見つめ続け、意識は闇へと落ちていった。

プロローグ（後書き）

小説本編第一話です。
書いてるときにもわかるんですが、文才がまったくありませんね。
こんな文でも、この小説に付き合っていただけたら幸いです。

ちなみに音無がくる少し前から物語が始まります。

第一話

「・・・ん」

俺は目を覚ました。目を開けると夜空に月が輝いており先ほどとはまったく違う景色になっていた。

「なんだ、ここ。バスは、みんなはどこに行った?」

俺は上半身を起こし、あたりを見渡すがそこには、でかい建物や木や草があるだけでバスなんてなかった。

おかしいな。俺って動けなくなっていて、見てるだけしかできなくなっていたはずなんだけど・・・。

俺は立ちあがり、歩いたりジャンプしたりしてみる。

ぜんぜん動くな。どうなってんだこりゃ。知らない制服着てるし。

と一人で考え込んでいると、

―――パン

と乾いた破裂音が響き渡った。

「今のは銃声か!?」

俺は考えるのをやめ、銃声がしたほうに駆け出した。

「なんだってんだよ畜生！？」

———学習棟玄関前

俺は角を曲がり、前を見据える。そこには、二人の少女が縦横無尽に動き回っていた。

一人はリボンのついたヘアバンドをしており、もう一人の銀髪の少女に銃を向けていた。

なにやってんだよ！？銃なんて危ないもん持って！？とりあえず止めねえと。

そう思いながら、俺はその二人に近づくが———

「なんだよあれ・・・」

俺は思わずそう口にしながら立ち止まっていた。

なんと銃弾が、銀髪少女に当たる寸前に壁に当たったかのように弾かれていたのだ。

そして次には、腕から剣を生やし、たまに銃弾を剣で弾きながらもう一人の少女に近づいていく。

そして、もう一人の少女の銃を右手の剣で切り捨て左手の剣を突き出す———

が、俺はとっさに動きへアバンドの少女に当たる寸前に右手で銀髪少女の左手をつかみ動きを止める。

そして左足を銀髪少女の足の後ろに置き、その少女の腕のひじあたりに左手を置きそのまま押し転ばす。

「「！？」」

二人の少女は突然のことに驚いていたが、俺は気にすることなくへアバンドの少女の手を引いて、この場を離れた。

———教員棟前

「ここまでくれば、もう大丈夫だろ」

「そうね。助けてくれてありがとう」

俺は立ち止まり少女のほうを向く。

「どういたしまして。そんなことより話してもらおうか。この状況を」

「そうか、あなた新人さんね。」

少女はひざに手を突き下を向きながら話す。

「どういうことだ？」

「そういうことについても説明するから」

といいながら、少女は顔を上げて

「――――ようこそ死んだ世界戦線へ」

そう言い放った。

第一話（後書き）

第一話です。

どうでしたでしょうか。

終わらせ方は非常に悩んだのですが今の形になりました。

こんな文ですがこれからもよろしくお願いします。

６月１５日追記

本日に気がついたのですが、この話の最初に「バス」やら何やら出てきますが、プロローグにそんな描写はありませんでしたね。

読んでて「ん？」と思った方は申し訳ございませんでした。

そのうち「光」の過去話でそのなぞが明らかになるのでまっていてください。

第二話（前書き）

第一話のミスのお詫びとして、二日連続投稿をさせていただきたいと思います。

第二話

「死んだ世界戦線？」

こいつは何を言ってるんだ。それじゃここが死後の世界みたいじゃ――――

「ここは死後の世界なのよ。」

・・・どんぴしゃかよ。

俺は思わずため息をしてしまった。

「・・・それを証明する材料は？」

「死んだときの記憶があるでしょ？

そして気がついたらこの世界にいた。

だから私に聞いたんじゃないの？」

「・・・なるほど。確かに俺には記憶がある。だが、死んだやつ全員来るわけではないだろ。なぜ俺は選ばれた？」

死んだやつが全員来ていたら、すぐさまこの世界はパンクしてしまうだろう。

つまり、何かしらの条件があるはずだ。

「ここは理不尽な人生だったり、納得できない死に方をした人たちが来る場所なのよ。」

なるほど。ようやくわかってきたぜ。

「つまりここは、未練のあるやつらが来て、そいつらの気持ちを整理する場所だというわけか。」

「そうよ。理解が早くて助かるわ。」

「じゃあ死んだ世界戦線って言うのは何だ？お前らは何がしたい？なぜさっきのやつと戦っている？」

「急に質問が多くなったわね。・・・まあいいわ。順番に答えていくと

死んだ世界戦線っていうのは、私達と同じ納得できない人生を送った人たちが

神に反逆するための組織みたいなものね。

簡単に言えば、理不尽な人生を強いたやつに何発もかましたいって言う組織よ。

で、さっきのやつは天使よ。」

「天使・・・か。確かにやつの力は人が行えるものではなかったな。

つまりあいつを通じて神とコンタクトをとるというわけか。」

「それだけじゃないわ。ここはさっきも言ったけど、未練のあるやつが来る場所。

つまり未練がなくなれば消える。それを手助けしているのが彼女。」

「だからあいつとは敵対しているわけだ。」

「そういうこと。あらかた説明は終わったわ。

で、どうする？仲間になる？」

そう言いながら俺に手を差し出す。

俺は考えた。俺の人生はお世辞でもいいとはいえないひどい人生だ。

・・・なら、神に反逆してもいいかもしれない。こんな人生を強いた野郎を気が済むまで殴れば、それはもうすっきりするだろう。

俺は手を差し出し、握手をする。

「これからよろしくな。」

「ええ。よろしく。私は死んだ世界戦線のリーダーのゆり。みんなからは『ゆりっぺ』なんて呼ばれてるわ。」

「俺は加藤光。好きに呼んでくれてかまわないぜ、ゆりっぺ。」

「それじゃあ戦線の本部に行きましょうか。加藤君。」

そういいながらゆりっぺは歩き出した。俺は

「ああ」

とだけ返事をし後に続いた。

これからは、楽しくなりそうだ。

第二話（後書き）

第二話です。

今回は会話文ばかりでしたね。

次回は、他の戦線メンバーと接触していきたいと思います。

第三話

―――教員棟三階

「・・・なあ、ゆりっぺ。本当にここが本部なのか？」

「さっきから本当だって言ってるでしょ。いい加減認めなさいよ」

と言ってゆりっぺはため息をついた。

いやでもここが本部だなんて信じられないでしょ。だってここ―――

「校長室じゃん！？これぼけてるだろ！？ぼけてるよな！？」

「だからぼけてないってば！ここが本部よ。」

「いやいやいやいや。ふつうさ、実はこの校舎の設計がずれてて隠し部屋ができてたてきなのあるだろ！？」

なんか目一杯にジェスチャーをする。

「それこそありえないでしょ。もともとできてたんだから手出しなんてできないし。それにまだ一回も天使の侵入を許してないわ」

それはすごいな。・・・ま、入ってみれば何かとわかるか。

俺は一気にテンションを下げる。

「落ち着いた？」

ゆりっぺが声をかけてくる。

「まあな。じゃ、とりあえず入ってみっか」

「あ、ちょっとまっ――――」

とゆりっぺの制止の声を無視してドアノブに手をかける。

するとガコンと頭上から音がして、ハンマーが振ってくる。

「！？」

俺はとっさに右側にある窓の下に転がる。

すると、ハンマーは頭上の窓を叩き割り、再び元に戻る。

俺は安全を確認した後ゆっくりと立ち上がり、ゆりっぺの方を向く。

「・・・ゆりっぺ」

と声をかけると、ゆりっぺは握りこぶしを目の上辺りに持ってくる。

もしやこれは――――

「てへ（きらりーん）」

「ちょっと待て！？てへって何だよ！？ちょっとやっちゃった、的な――――」

「ちょっとやっちゃった。てへ（きらりーん）」

「そのままじゃないか・・・まあいいや。で、どうなってんの」

「さっきのは、侵入者迎撃用のトラップよ。無事に入るためには合言葉が必要なの」

なるほどなるほど。つまり

「俺は合言葉なしにドアノブに触れたからああなったと」

「そういうこと。で、合言葉は」

と言いながら、ドアの前に移動する。そして

「神も仏も天使もなし」

そうつぶやいた。

すると、頭上からカチっと音がした。

「これでいいのか？」

「ええ。これで無事に入れるわ。合言葉のほうはわかったかしら？」

「そりゃもちろん。俺たちにぴったりだったな」

「でしょ。・・・それじゃあ入りましょうか」

「そうだな」

俺はこれから何が起こるのかを考えながら、ゆっくりとドアを開けた。

第三話（後書き）

一週間もあけてしまい申し訳ございませんでした。

なので今週は３回は投稿したいと思います。

第四話

ガチャと音を立てゆりっぺが先に入る。すると、

「おお、ゆりっぺ。無事だったか」

と青髪の少年が声を上げ、歓声も上がる。

「ええ、何とかね」

ゆりっぺはそういいながら一際大きい机へと向かう。

俺はと言うとドアからこそこそと中の様子を伺っている。

そして少ししてから話が終わったようで、ゆりっぺが

「そういえば新メンバーを見つけてきたわ」

と言う。すると大きな歓声が上がる。

ゆりっぺはプレッシャーをかけるのがうまいな。見事に緊張してきたぜ。

「加藤君入って」

・・・来たか。まあいいや。普通に普通に入ろう。普通にふつ――――

「ヤーーー。俺加藤。よ・ろ・し・く！」

重たい沈黙が流れた。
なにやってんだ俺はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！。気が動転して変なテンションになっちまったぁぁぁぁぁぁぁ！。
俺は、沈黙の中で意識を取り戻すと速やかに土下座の準備をしていた。
すると

「・・・ゆりっぺ。本当にこんなやつを仲間にするのか」

と、不満の声が上がった。
俺が変な挨拶をしただけに、かなりの正論だった。

「・・・今から捨ててこようかなって思ってる」

と言いながらゆりっぺは、銃を取り出し始めた。

「マジすいませんでした！こんなこと二度とやりません！超反省してるんで許してください！！」

俺は土下座しながら全力で謝る。

「・・・まあいいわ。彼は、素手で天使を迎撃してくれたし。」

「・・・先ほどのはともかく、そいつは頼りになるな。しかも新メンバーが二人もなんて、今回はついてたな」

「え？どうして二人？」

「ハンマー作動してたよね」

「それで一人は空を飛んだものと思っていたのですが」

そういうことか。

「あれか。あれはかわした」

「まじかよ！？」

「優秀な新メンバーだな」

「・・・さっきのは馬鹿だけど」

「もう忘れてくれよ！！」

最初の挨拶だけでここまで失敗するとは。俺泣いてもいいよね。

俺は、涙を流しながらさっきから思っていたことをたずねる。

「あのハンマーはやりすぎじゃないか？あんなのくらったらさすがに死ぬだろ」

「あれ、その説明はしてなかったの？」

「ああ、そういえば忘れてたわ」

「どういうことだ？」

「この世界に死と言う概念はないのよ。だからどんな傷を受けてもそのうち治るわ」

「そうだったのか」

ま、でもそれもそうか。死後の世界なのに死んだらどこに行くんだって話だからな。

「これで、ほぼすべての話は終わったかしら」

「そういえば吉野たちのことは話したのか？」

「ああそういえばそうだったわね。忘れてたわ」

「何か危険なやつらなのか？」

「一応死んだ世界戦線には入っているのですが、こちらに協力的ではなかったりするグループです」

「最近では死んだ世界戦線を乗っ取ろうとしているって話もあるんだ」

「物騒なやつらだな。で、そいつらには気をつけろってことだな」

「そういうこと。これで説明は終わりよ」

第四話（後書き）

中途半端なところで終わってしまいました。

第五話（前書き）

先週は三回は投稿すると言っておきながら二回しか投稿できなかったことを深くお詫びします。

第五話

「日向君、加藤君を寮まで送ってあげて」

「了解」

と言って青髪の少年が立ち上がり近づいてくる。それにつられて他のみんなも立ち上がり去っていこうとする。

でもちょっとまった。

「俺、みんなの名前紹介してもらってないんだけど」

「ああ、それも忘れてたわ」

「なんだかんだと忘れすぎだろ」

「俺は日向。本気を出せば何でもやれる男だぜ」

と、青髪の少年が寄ってくる。

「本当は馬鹿で、やれるときはたまにしかやらないわ。さらにこれだから」

と言いながら右手の甲を頬につける。

ふむ、なるほど

「送ってもらうのは違う人にしてくれ」

「勝手に人を変態にするなよ！！俺はいたってノーマルだ」

「それ以前のことにはつっこまないということは、真実なのか」

「それ以前につっこむことがあったんだよ！！」

「で、彼は大山君。特徴がないのが特徴よ」

「ようこそ戦線へ」

と、いたって普通な少年が一歩前に出てきて握手をする。

「彼が高松君。眼鏡をいちいち上げて話すのが特徴ね」

そういって眼鏡をかけた少年を指す。

「よろしく」

「ああ、よろしく」

高松と挨拶が終わった後、長ドスを持った少年が一歩前に出て来る。

「藤巻だ坊主」

とドスを聞かせた声で話す。

どうする。ここは反抗的に返すか。

「こっち見んな」

「んだと。てめ――――」

「フォーーーーーーーーーーー」

「のわーーー」

叫びながらバンダナをつけた少年が長ドス野郎を吹き飛ばし、前に出てくる。

「その彼は、ＴＫよ。本名は誰も知らないなぞの男よ」

「そんなやつでも戦線には入れるのかよ。と言うか、長ドス野郎はスルーかよ」

・・・なんというか、大丈夫かよ。この戦線。吹き飛ばされたやつの心配もしないし。かといって、俺も心配しないが。

「で、影でたたずんでいるのが椎名さん」

と言って、部屋の角を指す。そこには、少女がいた。

「ぜんぜん気づかなかった。よろしく」

「で、一際体がでかいのが松下君。柔道五段だから敬意をこめて松下五段と呼んでいるわ」

松下五段が前に出てくる。そして手を差し出す。

俺も手を伸ばし握手する。

「よろしくな」

「こちらこそ」

「で、最後は野田君。いつもハルバートを持っているわ」

「よろしく」

と声をかけるが、

「ふん」

と、無視されてしまった。厄介な野郎のようだな。

「ここ以外にも戦線メンバーは、何百人といるわ」

「めちゃくちゃいるな」

「で、次こそおしまい。その他のことはそのときになったら教えるわ。じゃこれ」

といって、制服をこちらに投げる。

「っと。この制服は？」

「死んだ世界戦線の制服だよ。この世界に着いたときは模範生の服だからな」

なるほど、制服の違いはそういうことか。

「それじゃ、解散。また明日集合ね」

と声があったとたん、全員校長室から出て行った。長ドス野郎は、地面につっぷしたままだが。

「じゃ、俺たちも行くか」

「OK」

その後、日向に寮の説明を一通り聞いたあと、別れてそれぞれ休んだ。

第五話（後書き）

書き忘れていましたが、作者は英語が苦手なのでＴＫの出番はほとんどありません。

第六話（前書き）

久しぶりの投稿になってしまいました

第六話

―――ＳＳＳ本部

「さて、全員集まったわね。今日は、新しく加藤君も入ったわけだし、オペレーションを行うわ」

ゆりっぺは唐突にそう告げた。

ここには、昨日のメンバーが全員そろっており、カーテンを閉めているためゆりっぺの後ろのディスプレイの明かりだけが室内を照らしていた。

オペレーションか。まあ、神に反逆する組織なわけだしそういうのがあってもおかしくないな。

「いつものトルネードか？」

「いいえ。今日は『オペレーション、ライジング・マウンテン』よ」

直訳すると、「山登り」といったところか。どんなミッションなんだ。

「初めて聞くオペレーションですね」

「最近、新しく考えたオペレーションだし、初めて言ったもの」

「でも、加藤君もいるわけだし『トルネード』で戦線に慣れてもらったほうがいいんじゃないの？」

「それに、食券も不足しているようですし」

「だからこそよ。このオペレーションは、山の探索と山菜などの採取が目的よ。加藤君の戦闘力は山の中で適当に見せてもらえばいいし、なにより彼の武器が決まってないじゃない」

「「「なるほど」」」

なんだかよく分からなかったが、とりあえず話はまとまってきたらしい。

「で、結局どうするんだ？」

と、俺は話を振ってみる。

「このまま、オペレーションを実行よ。そのまえにあなたの奨学金やら武器やらを回収しておかないといけないから、加藤君以外は山の入り口に、１２：００に集合」

そうゆりっぺの声がかかると全員が適当に受け答えして部屋から去っていった。

「加藤君こっちに来て」

と、まだいすに座っているゆりっぺに呼ばれる。

俺はゆりっぺのほうに向かいながら、

「俺たちは行かないのか？奨学金やら何やらを回収しに行くんだろ

？」

と、聞いた。するとゆりっぺは

「その前にやることがあるのよ。加藤君は武器のリクエストはあるかしら？」

そう答えた。

「武器か。でもその話は武器がおいてあるところでいいじゃないか。なぜここで？」

「武器庫に、あなたの望む武器が必ずあるとは限らないでしょ。だからここで、ギルドに頼んでおくのよ。ちなみに、ギルドって言うのは武器などのものを作っているところよ」

とため息交じりに答える。

「なるほどな。それにしても武器か。それなら、刀がいいな」

そう伝えるとゆりっぺは少し考えるようにして

「刀か・・・。ま、あなたは動きがよかったからだいじょうぶね。何かもっと細かい要請はあるかしら？」

そう言った。

「そうだな、刃の長さが４０ｃｍの小太刀を二本頼む」

「二本ね。了解」

ゆりっぺはそう言うと、パソコンで何かを打ち込んだ。それが終わると立ち上がり、

「さて、行くわよ」

と言った。

第六話（後書き）

またまた中途半端ですね。申し訳ございません。

それと、ここで軽く補足を。

この小説に書かれている刀と言うのは、日本で作られたと言われている日本刀のことです。

そして、日本刀にも種類があり刃の長さが３０～５０ｃｍのものはおもに『小太刀』と言われており、５１ｃｍ以上の長さのものは『太刀』と呼ばれています。

最後に、小説って本当に難しいですね。このままいくと、週一の投稿になってしまうかもしれません。

できる限り今までどおりで行きたいと思いますが、もしかしたらと言うこともあるかもしれませんのでご了承ください。

第七話（前書き）

更新が遅くなって申し訳ございません。

後書きで言い訳・・・もとい、事情説明させていただきたいと思います。

第七話

―――男子寮自室

「まさか、奨学金やらなんやらがあんな無造作に置かれているなんてびっくりだな」

俺は、事務室で拾った・・・もとい受け取った荷物を片付けながら話す。

「まあ、死後の世界だし盗まれたりなんてことはないのかもね。それか、新しく来た『人』が事務室に入った瞬間に現れるとか」

と、俺のベッドに腰をかけながらゆりっぺが答える。

「死後の世界ってのは便利だな。俺たちが生きてた世界では窃盗なんざ当たり前だってのに」

「本当よね。・・・本当、神ってのはどこまでご都合主義なのかしらね」

と、ゆりっぺのテンションが一気に下がる。

さっきの台詞はまずったか？

「片付けも終わったし、そろそろいくか。時間も迫ってきてるしな」

と、わざと話題をそらしつつ、明るく言う。

「・・・それもそうね。それじゃさっさと武器庫にいくわよ」
ゆりっぺも、さっきの気持ちを振り払うかのように明るく言った。

――体育館内部

「・・・ゆりっぺ。本当にここか？」
「さっきからそうだって言ってるでしょ。いい加減認めなさいよ」
ゆりっぺがあきれたようにため息をつきながら言う。
いやだってここ――
「体育倉庫じゃん！？体育館に来たから『天井裏に隠し部屋があったりするんじゃないか』とか思った俺の期待返せ！！」
「勝手に想像したあんたが悪いんでしょ！！というか、このやり取り二回目なんだしそこらへん察しなさいよ！！」
「無茶言うなよ！！」
お互いに怒鳴りあい、息を切らす。
そして数秒たった後、お互いに落ち着く。
「・・・こんなところで怒鳴りあっててもしょうがないし、入るか」

「そうしましょ」

と、言いながらゆりっぺが武器庫の扉の前に立つ。そして、

「神も仏も天使もなし」

と、合言葉を囁くと扉の向こうからガチャっと音がして、扉が開く。それと同時に男が顔を出す。

「っと、どうしたんだゆりっぺ、こんなところまで」

と声をかけられると、ゆりっぺは少し敵意を向けつつも、

「新人の武器を調達しに来たのよ」

と、返事をする。

戦線メンバーの制服を着てるし敵意を向けるなんて、どういうことだ？

「そうだったのか。俺は吉野だ。よろしくな」

っ、そういうことか。こいつが吉野だったのか。

俺は思わず敵意を剥き出しにする。

「おおっと、新人にいきなり敵意を向けられるとは、幸先悪いな」

と、手を上に上げながら『勘弁』と言った感じで言う。

っといきなり敵意を見せるのはまずいな。一応ごまかしておくか。
俺は敵意をフッと緩める。
「すまない。俺は人見知りが激しいんだ。俺は加藤。よろしくな」
「おう、気にすんな。こんな世界に来ちまったら人見知りにもなるってもんだ」
と、軽い感じで言いながら中に入る。
俺とゆりっぺもそれに続く。
俺は中に入ると心底おどろいた。
それは、一面武器だらけだったからだ。
俺が驚きおののいていると、ゆりっぺがそこらへんから武器をもって来る。
「こんなものでどうかしら」
と、ゆりっぺが手を広げた。
そこには、俺がギルドに発注した刀がしっかりと二本あった。
「ちゃんとあったなゆりっぺ」
俺はそれに手を伸ばし、刀を出し入れしつつ話す。

「でも、いつ作ったものかわからないから、頼んどいたのが届き次第変えたほうがいいわよ」

「了解」

と、軽く返事をしつつ、そこらへんに転がっていた刀を腰に差すためのベルトを身に着け、それに刀を差す。

「うわ、ぴったりだ。ここはすげえな」

と、はしゃぎ気味に言う。

「よかったわね。そんなことより、あんた銃はどうするの」

と、ゆりっぺがあきれ気味に言う。

別いいじゃないか。はしゃいだって、迷惑かけてないし。っと、それにしても銃か。

「ゆりっぺ、俺は射的はまるっきりできないぞ」

「・・・えっ」

と、ゆりっぺが心底絶望したかのような反応を見せる。

「いやだって、手を固定するとか我慢ならんし。武士ってのは腕を振るってなんぼだからな」

と、胸を張りつつ言う。それに対してゆりっぺは

「・・・あんたまったく使えないわね」

と、言う。

「失礼な。ちゃんと接近戦ができるだろ」

「逆に言えば、遠距離戦はからっきしってことでしょ」

そういえばそうなるのか。なら、

「そこは気にしない方向で」

「・・・そうしてあげるわ」

と、言いながらゆりっぺが出口に向かう。

俺はここでの用が終わったことを察しそれについていく。

そして、部屋から出たあたりで

「もう行くのか？」

と、後ろから声がかかる。

「ええ。この後作戦もあるから」

「そうか。それじゃまたな」

と、声がかかると、ガラガラと扉を閉められガチャっと鍵も閉まる。

そして、他のやつらがいないことを確認すると俺は歩きながらゆりっぺに

「なんで、吉野は武器庫にいるんだ？」

と、小声で話しかける。

「吉野たちは、武器管理が仕事なのよ」

と、当然のように話す。

「まずくないか？俺たちを襲ってくるかもしれないんだろ。武器の管理なんてされてちゃ、簡単にやられちまうぞ」

「と言っても、長い間武器管理を任せてきたから突然変更なんてできないのよ。そんなことしたら、『怪しんでます』って言ってるようなものだしね」

「確かに。なら、襲ってこないことを願うばかりだな」

「そうね」

と、会話をした後俺たちは集合場所へ足を運んだ。

第七話（後書き）

まことに申し訳ございませんでした。

夏風邪と夏バテのダブルパンチが飛んできたり、パソコンが一時期禁止されたりといろいろとあったんです。

まあとにかく、これからはまた週二のペースでやって生きたいと思いますのでよろしくお願いします。

第八話（前書き）

更新が遅くなり本当にすみません。

夏休みにやる気がとらわれてしまっていて、まったく更新できていませんでした。

第八話

―――登山道入り口

「さて、これからオペレーション・ライジングマウンテンを実行するわ。全員荷物は持ったわね」

と、ゆりっぺが声をかける。
荷物と言っても登山用バックの中に、サバイバルに必要なロープやナイフなどが入っているだけだ。
ちなみに準備したのは、高松だ。

「持ったけど、あのハルバート野郎がいないぞ」

「あの馬鹿はほっといても大丈夫さ。よく『ゆりっぺの手を煩わせるまでもない』とか言って一人でつっこむからな」

「・・・あほだな」

俺は、思わずそうつぶやいてしまっていた。

ゆりっぺは空を見上げながら、

「それじゃ、雲も出てきたし雨が降る前に出発よ」

オペレーションの開始を伝えた

――――２０分経過地点

「・・・どうして」

ゆりっぺが唐突にそうつぶやいた。

「どうしたゆりっぺ」

と、俺が尋ねる。

「・・・どうしたかですって？どうしたもこうしたも、珍しいものなんて何もないじゃない！！」

そうゆりっぺが叫ぶ。

まあ、叫ぶのも無理はない。山道はかなり荒れ果てているし、木や草もこれと言って珍しいものなんてなかった。

「まあ、落ち着けよゆりっぺ。ほら、すぐ前に広場みたいなものもあるしさ」

「あるからどうしたって言うのよ！」

だめだこりゃ、ゆりっぺ相当切れてるな。結構気が短いんだな。

「いや、ちょっと休憩しようぜ。そこになら珍しいものもあるさ」

と言っていると、広場に着く。

よし。広場にあるものを伝えつつ、なだめよう。

「ほら、ある程度開けた場所で、なんかハルバートがあるし、なん

か果実が実っている木もあるし、なんか人もいるし――――ってあれ？」

なにか、山の広場にしてはまったく関係のないものまであったような・・・。

もう一度よく見てみよう。

・整備された木や草

・果実が実っている木

・木にもたれかかっているハルバートと人

なるほど。間違いなく――――

「野田じゃね、あれ」

――――ハルバート野郎だった。

第八話（後書き）

夏休みが終わりようやく、やる気が自分の中に舞い戻ってきました。

本当に更新せずにいてすみませんでした。

これから、また更新を再開します。

よろしくお願いします。

第九話（前書き）

久々の更新です。

第九話

――――山道途中広場

「なあ、何でこんな所に野田がいるんだ？」

「単純に迷ったのではないか？」

「そういえばこの前、『やはり、シチュエーションは大事だな』てつぶやいてたよ」

「つまり、俺を待ち伏せていたと」

「あほ丸出しじゃねえか」

と、野田の話をしていると唐突にハルバートを俺に向け、

「俺はまだ貴様を認めてなどいない。来たばかりなのに、ゆりっぺにベッタリしよって！！」

と、喧嘩を売ってくる。だが、

「・・・本音は後者じゃね」

「・・・ええおそらく」

「あほだな」

「あさはかなり」

すぐさま本音を見抜かれ馬鹿にされていた。俺も内心『あほだ』とは思っているのだが。
そもそも、

「この戦線は、全員に認めてもらわないとだめなのか？・・・待てよ？だとしたらっ、とてつもない量の署名が必要じゃないか！？うっわ、マジか。ぜんぜん署名集めてねえよ。どうしよ」

と、少しボケをかましながら言う。それにたいして、

「いや、署名は要らないからな」

と普通のツッコミが帰ってくる。

「・・・日向、お前のツッコミは切れがまったくないな」

「ほっとけよ！そもそも、お前のボケの切れがなさ過ぎるんだよ！」

「馬鹿か日向。どんなボケもツッコミひとつで笑いが取れるようにできるもんだろ。それをわかってないから、『ツッコミが下手な男』略して『ヘナ男』なんて呼ばれるんだぞ」

「一回もそんなあだ名で呼ばれたことねえよ！！と言うか、なんで『ヘナ男』なんだよ！そこは、『ツナ男』とか『ツヘ男』とかあるだろ！」

「日向、お前は本当に甘ちゃんだな。『ツヘ男』は語呂が悪いし、『ツナ男』は『ツナ缶』に語呂が似てるだろ」

「『ツナ男』のだめな理由、かなりどうでもいい！！」

「それに、『ヘナ男』には、『へなちょこな男』略して『ヘナ男』と言う意味も含まれているんだぞ」

「尚性質が悪いわ！！」

「まあまあ、落ち着きなさいよ。日向君のツッコミが下手なんて前からわかってたことじゃない」

「ほっとけよ！！」

「話はそれたが、あいつはスルーしてもいいのか？」

「かまわん」

「わかった」

よっしゃ。事件解決———

「そこは、わかるなよ！！と言うかすでにスルーしてだろ！！」

かと思ったが野田につっこまれた。

「・・・じゃあどうすれば良いんだよ？お前の発言に対して毎回反応すれば良いのか？」

「そういうことを求めているのではない！！どちらがゆりっぺに相応しいか、俺と勝負しろ！」

なるほど。野田と勝負して勝てばいいのか。そうすればどちらがゆりっぺに相応しいか決められる――ってあれ？

「なんでゆりっぺに相応しいかの勝負になってんの？野田に認めてもらうための勝負じゃないのか？」

「・・・あー、そういう所突っ込んだら負けじゃね？ほら、あいつあほだし」

「・・・まあ、確かにな」

野田があほだと言うことを痛感するのは本日何度目だろうか。

「まあ、あほだということは置いといて、勝負は受けよう。自分の実力も知っておきたいしな」

「そうね。加藤君の実力が確認できる、いいチャンスね」

「リーダーの了承ももらったし、さっさとやろうぜ」

「ふん。貴様など、瞬殺してくれる」

こうして、俺の初戦は野田に決まった。

第九話（後書き）

最近、体育祭の練習で疲れて家に帰れば布団にＧＯしてしまいます。

それと、たまに文を大幅に改良していたりすることがあるので、以前の話もたまにチェックしていただけるとうれしいです。

今は不定期更新になってしまっていますが、ちゃんと、ペースを戻していきたいと思います。

第十話（前書き）

初めての戦闘シーンです。

第十話

「そういえば、勝敗はどうやって決めるんだ？」

「そうね・・・どっちかがやられるまでいいんじゃない？」

いまゆりっぺが言った『やられるまで』というのはおそらく、『どちらかが死ぬまで』ということだろう。

「・・・いいのか？せめて『一撃入れたほうが勝ち』とかのほうがよくないか？」

「別にいいだろ。どうせ、死なないし」

ここは死後の世界であり、死ぬことはないということはわかっている。それでも、

「さすがに殺すってのはちょっと・・・」

俺はまだこの世界に来て数日しかたっていないため、『死』というものに慣れていない。つまりは『殺す』というものにも疎いわけで、正直言ってかなり抵抗がある。

「抵抗があるのはわかるけど、この世界ではどうせ死なないわ。それに、今のうちに慣れておかないと仲間がやられたとき結構きついわよ」

「・・・それもそうだな」

この世界での戦闘はやるかやられるかだ。それは天使との戦闘の場合にもいえるわけなので、ここでなれておかないといけない、と強引に自分を納得させる。

「それじゃ、はじめるか」

俺と野田はある程度の距離を開けて対峙する。

「いくぞぉぉ！！」

野田が声を張り上げるとともに走り出す。俺は、相手の動きを調べるために刀を手に持たず足に力を入れて回避するのに専念する。

野田は俺に近づくと左上から右下に思いっきりハルバートを振り下ろす。俺はそれを後ろに飛び回避するが、野田はすぐに体を前に出し、右下から左上に振り上げる。

「あぶな！」

俺は右に転がりつつそれを回避するが、すぐに野田がハルバートを横に凪ぐ。すぐさま後ろに飛ぶが、少しかすったらしく制服が破れる。俺はさらに後ろに下がり距離をとる。

さっきのはかなり危なかった。気を抜いていればやられてたな。でも、相手の腕がある程度わかったし、

「そろそろ、行くとしますか」

と、俺は刀を抜き両手に持つ。

「ふん、ようやくやる気になったか。だが、勝つのは俺だ！！」

野田が頭上に構えて再度突っ込んでくる。

ハルバートはかなりの重量武器で、一度振るえば他の近接武器に比べかなりの隙ができるはずなのだが、それがほとんど省略されていた。『ほとんど』隙はなくなっているが、『１００％』なくなっているわけではない。つまり、そこを狙えば勝てる。

野田は先ほどと同じように左上から右下にハルバートを振り下ろす。俺はそれをさっきと同じように後ろに飛びかわす。

「さっきと同じとは！！」

そういいつつも、野田も先ほどと同じように体を前に出し、ハルバートを振り上げようとする。

「そこだ！！」

俺は、振り上げようとしているハルバートに右剣をたたきつける。

「なにぃ！？」

そうして動きの止まった野田に、左剣を突き出す。それは、野田の体を――心臓を貫いていた。

俺は刀をすばやく抜き取ると、野田は地面に突っ伏した。すると周

りから歓声が上がる。

「すげーぜ、加藤」

日向にそうほめられるが、心はもやもやとしていた。やはり、殺すっていうのは良い感覚ではないな。

「さすがね。その調子で天使も頼むわ」

「お手柔らかにお願いしたいもんだな」

「それもそうね。高松君、果実は回収しといたかしら？」

「ええ、もちろん」

そう言う高松の周りには、果実が入っているであろうバックがたくさんおいてあった。

「それじゃ、先に進むとしましょう」

「野田は置いていってもいいのか？」

すごく普通にスルーしていたため思わず聞いてしまった。

「半日もすればおきるし、ほっといてもだいじょうぶだって」

「・・・まあ、いいけどさ」

と、言っている間に、全員がバックを背負っていた。俺もバックを背負ってゆりっぺのそばに行くと、ポツンと頭に何かが当たる。最

初は何かわからなかったが、それに続くように2・3と降って来たためそれが雨だということに気づく。

「ゆりっぺ、雨が降ってきたぞ」

と俺が言うと少し考えてから、

「まだ小降りだし、もう少し進みましょう」

そう言った。戦線メンバーは微妙な顔をしていたが、『それもそうだ』と納得すると口々に了解を告げた。

第十話（後書き）

ようやく戦闘シーンに入れました。

このオペレーションはもうちょっと続きます。

第十一話

―――再出発地点より、２０分経過地点

「・・・ゆりっぺ、もう引き返さないか？」

日向が痺れを切らし、そうたずねる。だが、それは愚問だ。なぜなら、

「・・・それができないからこうやって雨が止むのを待ってるんじゃない」

小降りだった雨は、５分くらい前から土砂降りになったからだ。しかもそれは並大抵のものではない。体中に突き刺さるような痛みがほとばしり、目もまともに開けられないほどのものだ。

それほどの雨の中、まともに整備されていない曲がりくねった山道を戻るのはほぼ不可能だろう。だから今は木の下で雨宿りをしている。だがそれもあまり意味はなく、木の下にいる俺たちにも雨は降り注いでいた。

「でも、どうせ雨に打たれるなら少しでも戻ったほうがいいんじゃないかと思って」

「それじゃあ戻ってみなさいよ」

「いや、まあ、無理だけど」

「なら言わないでよ。まったく・・・」

と言いながらため息をつく。

「でもゆりっぺ。もし雨が止むのが夜ごろだったらまともに動けないし、最悪ここらで一泊することになるぞ。それなら、多少は無理をしてでも引き返したほうがいいんじゃないのか」

「・・・それは・・・そうだけど・・・。でも、さすがに無理があるんじゃないかしら」

と、少し後ろ向きな感じで言う。ここは俺が少し励まして、戻るように促すか。

「俺は、不可能を可能にする男だぜ。それぐらいどうにかするさ」

俺がそう言うと、

「ならこの雨をどうにかしなさいよ」

と即答された。

「・・・いや、その。・・・自然現象には介入できないんだ」

俺は知恵を振り絞り、何とかそう返す。すると、ゆりっぺは蔑みの目を向けてくる。

やめて、そんな目で俺を見ないでくれ。

俺が必死に目をそらしていると、ため息をつきつつ

「今から何度も休憩をはさみつつ、すこしづつ引き返すわよ」

と、ここにいる戦線メンバーに聞こえる声で話す。それを聞き戦線メンバーはさまざまに反応をしながらも、バックを背負いのろのろと引き返し始める。

俺もそれに続こうと腰を上げるが、ゆりっぺだけは木にもたれながら動こうとしなかった。

「どうしたんだゆりっぺ。戻らないのか？」

「・・・せっかくここまで来たのに引き返すなんて、もったいない気がするのよね」

「と言っても、３０分位しか進んでないぜ」

「それもそうなんだけど・・・」

と、歯切れが悪かったがしぶしぶといった感じでバックを背負う。俺もすぐにバックを背負い、すでに引き返してる戦線メンバーの方を見る。すると、姿がぼんやりとしか見えないほどまで距離が離れていた。

「結構離されているみたいだし、早く行こうぜ」

と、声をかけたそのとき。ドドドッという音とともに地面が揺れ始めた。

第十一話（後書き）

なんとも微妙なところで終わってしまいました。

時間も時間なので許してください。

それと、本文中に出てきた『再出発地点』というのは野田と戦闘を行った広場のことです。

最初見たときに『何のことだ？』と思った方がいたらすみません。

第十二話

ドドドッ！！

「なんなのよ・・・これ」

ゆりっぺの困惑した声が響く。俺も困惑しているが、それでも頭を必死に動かしていた。

まず地面が揺れている。地面を揺らす災害と言えば『地震』。だが、そうだとしたら音の正体がわからない。それになんだか音が近づいて来てるような気がする。

そこまで考えて俺は引っ掛かりを感じる。

『音が近づいてくる』？今ここは山の中で、大雨が降っていて、さらに揺れとともにすごい音がする。

「ってことは・・・」

俺は今考えていることが違うことを願いながら山の上のほうを見る。そこには―――石や木やらがすごい勢いで落ちて来ていた。

「「うわぁぁぁぁぁぁ」」

ゆりっぺも気がついたらしく、俺と悲鳴がハモっていた。俺たちは悲鳴を上げると同時に、すぐさま全力疾走を開始する。だが、山道の整備状態が悪いため走行スピードが遅いうえに、土砂崩れの範囲が広いためなかなか安全圏まで行けない。それに加え、ゆりっぺは

女性であるために足腰の踏ん張りが利いておらずさっきから危うい。
そのとき

「きゃっ」

とゆりっぺが小さい悲鳴を上げ地面に転がる。さらに、転んだ先が悪く、足がえぐられていてゆりっぺが顔をゆがませる。

「私はいいから・・・先に行きなさ―――」

ゆりっぺが言い終わる前に、俺はゆりっぺを抱えすぐに走る。

「ちょ、ちょっと何してるのよ!?私はいいから早く逃げなさいよ!あなたまで巻き込まれるかも―――」

「ゆりっぺは置いて行かない!!」

また、ゆりっぺが言い終わる前に遮る。

「ゆりっぺは、戦線のリーダーであり仲間だ!・・・それに俺は、仲間を見殺しにはできない性質の人間なんだ」

それを聞いたゆりっぺは、呆然としていたが、いつものしっかりとした顔に戻すと、少し顔をそらして

「・・・ありがとう///」

とつぶやいた。その顔は少し赤い気がした。

「どういたしまして。・・・まあでも今かなりピンチだけどな」

今の状況は、もう少しで安全圏に走り抜けれそうだが、その直前に土砂に巻き込まれるといったところだ。

このまま行ったら二人とも巻き込まれるな。・・・ならしょうがないよな。

「・・・ゆりっぺ。巻き込まれる直前にゆりっぺを俺が投げる。ちょっとは痛いかもしれないけど――――」

「加藤君は置いて行かない」

と、次は俺の言葉が遮られる。

「加藤君は戦線のメンバーであり仲間よ。・・・それに切り抜けるための作戦はあるわ」

といって俺のほうを向き、にっと笑う。

さっきの俺のせりふにかぶせてきやがったな。・・・まあでも、ここはリーダー様に任せてみるか。

「じゃあ、まかせたぜ。ゆりっぺ！」

俺は、さらにスピードを上げる。そして、土砂に巻き込まれるまで、後数秒・・・といったところでゆりっぺが懐から手榴弾を取り出し安全ピンを口で抜き取り土砂に向かって投げる。

土砂にあたると同時に手榴弾は爆発し、土砂の進行を数秒遅らせる。その数秒のうちに俺たちは安全圏まで走りぬけた。

第十二話（後書き）

音の正体は土砂崩れでした。もうすでにわかっていた人は多いと思いますが。

そしてようやくゆりっぺのデレが出ました。

・・・ええ。わかってますよ。ゆりっぺはあんなところでデレたりしませんよね多分・・・。

まあその辺は『こんな作者の作品だからしゃあねえな』と大目に見てください。

第十三話

「大丈夫か？ゆりっぺ」

もう何度目かわからない質問をする。ゆりっぺの足には痛々しく包帯が巻かれていた。

「さっきから大丈夫だって言ってるでしょ。これくらいの怪我は１時間もすれば治るんだから」

ゆりっぺがあきれた感じで答える。この返答も何度目かわからない。

「俺はまだ『怪我はすぐに治る』ってことになれてないんだからしょうがないだろ。あんなに深い傷だったんだし心配もするさ」

「それでも度が過ぎてるでしょ！もう何度目のやり取りよ！あれから３０分ぐらいしか経ってないのに、１０回はしたわよ！っていうか、このやり取りも二度目よ！」

と、ゆりっぺが声を荒げる。土砂崩れから脱出した後、俺たちは近くにあった大きな木の下に腰をおろしていた。

「それぐらい心配なんだって」

俺は真剣な表情で言葉を返す。そのせいかゆりっぺは、面食らったような表情をする。それから数秒後、深いため息をつく。

「・・・心配なのはわかったわ。でも、私はもう大丈夫だからその質問はもうしないでいいわ。ていうか次したら撃つから」

「そんなに嫌だったのかよ！！」

懐から銃をちらつかせながら本気の目をしていたため、思わず大声を上げる。ゆりっぺは心配されるのが嫌いなのか？・・・いや俺が何度も同じ質問してたからだよな。少し自重しよう。

そんなことを思いながら、地面に横たわる。

「・・・なんであんたは寝転がるわけ？」

「なんとなく足が疲れたな～と思って」

「どんだけフリーダムなのよ。まったく」

そんな言葉を耳にしながら、俺はふと目を閉じた。

俺はふと目を覚ます。

「・・・あれ、俺寝ちまってたのか？」

そうつぶやきながら体を起こす。―――だが、体の上に何か乗っているらしく体を起こすことができなかった。首だけを動かし確認すると、そこにはゆりっぺが乗っかっており静かに寝息を立てていた。

「・・・・・・えっと・・・・？・・・・・・・・」

すぐさま俺の頭はフリーズした。そして数秒後、その事実を理解すると同時に、

「どぅわ！？」

テーブルクロス引きの用量でゆりっぺを動かさないようにすばやく脱出した後、地面を数回転がり距離をとる。音であらわすと

グルッ
ゴロゴロゴロッ
バッ

といった感じだ。うん、何の意味もない。

「・・・うぅ・・・ん・・・・」

今の騒ぎで起きてしまったのかゆりっぺが、目をこすりながら体を起こす。そして、半開きになっている目でこちらを見据える。

「・・・なんでそんなに離れてるわけ？」

「・・・簡単に説明すると、目が覚めたらゆりっぺがのっかていたため、驚いて距離をとった」

俺が的確かつ簡単に説明すると、

「・・・へー・・・・」

とゆりっぺが興味なさげに返事をし、視線をそらす。そして数秒の沈黙が流れる。

「えぇぇぇぇぇぇ！？」

だが、その沈黙もゆりっぺの絶叫により破られる。

「あんた！人が寝てる間に何、手を出そうとしてるのよ！！／／／」

とゆりっぺが顔を赤くしながら声を上げる。

「手出そうとしてねえよ！？上に乗ってたのはゆりっぺだからな！！」

「私からそんなことするわけないでしょ！！／／／」

「じゃあ何で上に乗っかってんだよ！！」

「知らないわよ！！／／／」

ここでいったん会話が終了し、呼吸の乱れた音だけが聞こえる。それにしてもなんでゆりっぺが乗っかってたんだ？俺が寝転がったときゆりっぺは・・・そういえば隣にいたわ。つまり、

「・・・ゆりっぺがたまたまこっちに倒れただけじゃね？」

「・・・あ・・・なるほどね・・・」

第十三話（後書き）

また、日数が空いてしまい申し訳ございません。

１１月に入ってから月・金とテストがあったので時間が取れませんでした。

次は大丈夫だと思います。

第十四話（前書き）

またまた日程が空いてしまいすみませんでした。

詳しい事情は後書きで。

第十四話

「それで、どこか行くあてはあるのか？」

先ほどの騒ぎから数分経った後、一度土砂崩れがあった場所まで戻り、通ってきた道へ戻れないことを確認した後再び進んでいた。

「そんなものないわよ。とりあえず先に進んでるだけ」

「・・・ですよねー」

・・・結局今の状況を再確認しただけか、と思いつつため息をもらす。

「しょうがないでしょ。このオペレーションは初めて行ったんだから」

「・・・そうですね」

再びため息を漏らしながら言葉を返す。

「でも、一応成果はあったわね」

「え？なにそれ」

首をかしげながらたずねると、こちらを向いて自信ありげな顔でこう言った。

「こんな世界でも、土砂崩れは起きる！」

「めちゃくちゃどうでもいい成果だな！？」

成果と被害の割合は、成果１％、被害９９％だと思う。ほとんどデメリットしかない。

「かなり重要な成果じゃない。この世界の情報はかなり少ないんだから。これでこのオペレーションを雨の日に行うのは危険ということがわかったわね」

「・・・雨の日に山に登るのは危険っていうのを再確認しただけだろ」

「前の世界で起きたからといって、この世界でも起きるとは限らないでしょ。それに昔の人だってこうやって手探りで覚えてきたはず――――」

「俺は原始人ではないつもりだがな」

と返事をして、ゆりっぺが隣にいないことに気づく。俺は立ち止まって後ろを振り返るとゆりっぺがまっ青な顔になり山の上のほうを見ていた。

「・・・また土砂崩れか？」

勘弁してくれ、と思いながらゆりっぺの視線を追ってみると。鋭く光る眼光、鋭く光る物体。それらを覆うとても暖かそうな印象を受ける黒いボディー――――。とそこまで考えたところで思考をやめ、脇目も振らず全力で走る。ゆりっぺもまったく同じ考えに至ったらしく、俺の隣を全力で走っている。

「ゆりっぺ。あれってもしかして、最高時速約４０ｋｍと噂のあいつでは？」

「おそらくね。この世界でも現れるなんて・・・。でも新しい情報よ」

「ああ、この情報はありがたいな」

「あなたもようやく、情報のありがたみがわかってきたようね」

「まあな。これで俺も、本当の意味で戦線の仲間入りだな」

「そうね。ようこそ死んだ世界戦線へ」

「お、サンキュー。これからもよろしく」

「ええ、こちらこそ」

声はとても穏やかで笑いあっているが、今は絶賛疾走中だ。そのことをご理解いただきたい。それにしても人は必死になってるとき、これほど穏やかになれるものなのか。これまた新しい情報だな。これは実に――――

「「――――嬉しくねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」」

さすがに耐えられなくなり、ゆりっぺとともに絶叫する。

「ゆりっぺ、何で熊なんて出るんだよ！？ここは卒業させる場所だろ！？あんなんに襲われたらある意味昇天するわ！！」

「知らないわよ！！ていうかあなたさっき自分で言ってたわよね。時速約４０ｋｍって。しかも私の情報では熊に背中を見せてはいけないらしいわ」

「じゃあ逃げてても意味ないじゃん！？いやまて、たしか熊は人に襲われない為に先に襲うらしい。それなら、俺たちは迅速に離れたから追ってきてないんじゃね？」

俺は全力疾走を続けながらサッと後ろを見る。だが俺の期待ははずれ、熊は追いかけてきていた。

「なんかめっちゃ追ってきてるんですけどぉぉ！？」

「またまた私の情報によると、熊は繁殖期の場合、えさとして襲う事があるらしい」

「そんな情報要らなかったよ！？俺たちの未来が絶望に変わっただけじゃん！？」

あれ目から汗が出てきた。必死に走りすぎなのか？なんかもう疲れたよパ〇ラ〇シュ・・・。

「現実逃避するな！！」

「ふべ！？」

ゆりっぺに走りながら頬を殴られ変な声を出す。

「ぶったね！親父にもぶたれたことないのに！」

「だから現実逃避するな！！」

「ぐは！！・・・はっ。俺は一体何を・・・」

どこかに意識が飛んでた気がする。

「そんなことはどうでもいいから、あれをどうにかしましょう！」

「俺にとってはどうでもよくない気がするがオーケー・・・っと、その前にどっちに行くんだ！？下か？上か？」

いままで一本道だったが、ここに来て道が二つになった。見た感じ下は、とてもきっちりと整備されており進みやすそうだ。それに比べ上は、今までと同じようにあまり整備されておらずもっと前のほうには岩が見える。となるともちろん下だよな。

俺がゆりっぺの方を見るとやはりゆりっぺも同じ考えに至ったようだった。俺たちは声をかけることなく同時に下の道へと走った。

第十四話（後書き）

はい、お久しぶりです。長らく更新せずにおり、すみませんでした。

実はというとですね、自分は受験生なんです。ですので最近は勉強ばかりしてます。

ですから、更新が遅れたというわけなんです。

ですので、真に申し訳ないのですが更新を月一回にさせていただきたいと思います。

途中でこの小説を投げ出す気はないので、受験が終わり次第、またがんばって更新したい思います。

本当にすみませんがそのようによろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7339t/

Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！　－Ｓｔｏｒｙ－

2011年12月9日02時51分発行